

質的研究におけるリサーチ・クエスチョンの作り方

How the good research questions in qualitative inquiry can be formulated?

市村 操一

(東京成徳大学)

片桐 智佳

(東京成徳大学大学院)

Soichi ICHIMURA (Tokyo Seitoku University)

Chika KATAGIRI (Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University)

要 約

質的研究においては、インタビューデータの分析法とともに、どのような研究の問いを立てるかということも重要である。問いの立て方によって、インタビューでの発問の仕方も変わってくる。また、質的研究のどの技法を使うかということも、研究の問いの立て方によって異ならなければならない。研究の問いのことを英語の文献では research question という言葉が用いられているが、翻訳された文献では訳語がまちまちである。本論文では翻訳の状況を展望するとともに、質的研究法の教科書で看過されがちで、十分な解説がなされていないリサーチ・クエスチョンの意味を明確にすることを第一の目的とした。さらに研究の過程のなかでのリサーチ・クエスチョンの位置と機能を解説し、エレガントなリサーチ・クエスチョンの作り方を紹介した。

キーワード: 質的研究法、リサーチ・クエスチョン、グラウンデッド・セオリー・アプローチ、現象学的研究

心理学における質的研究の広がり

21世紀に入ってから心理学の研究法として、質的研究法のさまざまな方法が紹介されるようになり、その方法を使った研究も学会誌に掲載されるようになってきた。日本のアマゾン社のウェブ上で図書館目録では、2008年に発行された書籍で「多変量解析」というキーワードで検索されるものは7件であるのに対して、「質的研究法」では9点が検索される。アメリカアマゾンでは2009年出版予定の書籍の予約が始まっているが、そこで紹介されている質的研究法 (Qualitative

Research Methods) に関する書籍はじつに47点にのぼる。

日本の心理学関係の学会誌に掲載される質的研究の数の増大の背景には、修士論文、ときには卒業論文でも、質的研究法が心理学の研究法として指導教員などから認められてきている現状をうかがうことができる。東京成徳大学でも修士論文にも博士論文にもいくつかの質的研究法が使われている。卒業論文では簡易な質的研究法が、インタビューデータだけではなく、文書データ (資料) の分析にも応用されている。2008年度の卒業論文では、「秋葉原無差別殺人事件」に関して総合雑

誌や週刊誌に発表された論評の内容分析が、データ帰納的方法によって試みられた。

下, 2006, pp. 109-110)

適切な問いの重要性

心理学における質的研究が、卒業論文でも行われるようになったが、学生・院生の注意はインタビューデータの分析法に集中しているようで、研究のテーマや目的や問いについて、それらを適切なものにしようとする関心は薄いように思われる。木下（2006）もこの点についてつぎのように述べている。

『研究テーマとの関連で強調しておきたい基本的な考え方について述べよう。これは、研究とはそもそも何のための活動なのかという、研究活動の目的をめぐる問題である。論文を書いて発表することが当面の課題である状況におかれると、研究は「当然するもの」あるいは「しなければいけないもの」となり、あとはどのようにするか、したらよいのかを中心に関心が突き進んでしまうのだがこれは非常に危険である。大学院生に典型的に見られる傾向であるが、まずは立ち止まって自分の足元をみることが重要となる。

そのためにはまず、適切な問い — research questions — が立てられているかどうか、つまり、探求に値する意義のある問題が発見できているかどうかを検討する。研究の結果を問う前にまず問いの適切さ、意義を問う。……適切な問いが立てられていることによって、その研究は社会的現実との間に位置づけられるからである。……研究活動が「するもの」、「しなければいけないもの」になったために、また研究の評価が「調査分析方法」中心になされる傾向が強いために、「問い」自体の重要性や「結果」が現実といかなる関係にあるのかを評価することは非常に希薄になっているという現状がある。』（木

本論考の目的

質的研究では、自然科学の研究で仮説が担う重要性を、リサーチ・クエスチョンが担っている。何を研究するか、研究対象についてどのような問いを発するかはリサーチ・クエスチョンによって方向づけと焦点が定められる。しかしながら、質的研究の方法を紹介している多くの文献は、インタビューの結果得られたドキュメントの分析方法の解説に焦点がおかれていて、インタビューの準備段階である研究の問題や目的の設定の方法についてはあまり力点が置かれていない。リサーチ・クエスチョンについても説明は十分とは言えない。質的研究法の教科書ともいべき Smith（2003）や、Murray and Chamberlain（1999）や、鈴木（2006）などには索引にも research question という言葉さえ見あたらない。翻訳書でその言葉にあたる概念を扱っている文献では、訳語がまちまちである。そこで、本論考では、①訳語の検討、②リサーチ・クエスチョンの定義、③研究デザイン全体のなかでのリサーチ・クエスチョンの位置と機能、④有効なリサーチ・クエスチョンの立て方などについて、質的研究を志す学生・院生の参考になるように論ずることとする。

リサーチ・クエスチョンの訳語

Research question という言葉は、質的研究、あるいは人間科学における研究のクエスチョン〈Human science research question〉（Moustakas 1994, p.105）の短縮された言葉であって、自然科学の研究における仮説の提起とは異なる専門的な意味をもっている言葉であるが、翻訳書ではさまざまに訳されている。いくつかの訳語の例をあげておくことは、質的研究法を勉強する人々の役に立つと思われる。ウィリッグ（2003）（大淵他訳）ではくりサーチ・クエスチ

ン)となっている。フリック (2003) (小田他訳) では〈研究設問〉という言葉が当てられている。また、この訳書の[質的研究用語集]なかで小田は〈研究設問 research question〉の解説をつぎのように行っている。「(研究設問とは) 研究で答えられ、明らかにされるべき問い、あるいは研究のために設定された問題のこと。〈研究課題〉だとか〈研究テーマ〉と訳されることもあるが、〈問い〉の側面を強調するためには〈研究設問〉という訳語のほうが適している (フリック, 2003, p. 394)」と述べている。

Strauss and Corbin (1998) の翻訳を行った操と森岡 (1999) はresearch questionに〈研究上の問い〉という訳語を当てている。この本の4章で〈研究上の問い〉はつぎのように定義されている。「研究上の問い Research question: 研究で答えられ、明らかにされるべき問い。その研究上の問いはプロジェクトのパラメーターを設定し、データ収集と分析に用いる方法を提案する (ストラウスとコービン, 1999, p. 47)」プロジェクトのパラメーターを設定するということは、研究の対象とする変数あるいは要素を定めるという意味と解釈してよいだろう。たとえば、不登校から立ち直った児童の質的研究において、「立ち直る過程で学校に戻る誘因を児童はどのように認識したのか?」という研究上の問いを設定したとすると、そこではパラメーターとして〈友人〉〈教師〉〈親〉〈学業〉などの要素が考慮されることになろう。

ホロウェイ他 (2000) では、第2章 [研究プロセスにおける最初の段階] でresearch questionの問題が取り上げられている。この訳書を原著 (Holloway and Wheeler, 1996, pp. 20-21) と突き合わせてみると、訳語が一定していないことが分かる。〈研究の問い〉と訳されたり、〈研究課題〉となったり、〈研究問題〉とも訳されている。また、topicも〈研究課題〉と訳されている (pp. 21-22)。

木下 (2006) は、大学院生がグラウンデッド・

セオリー・アプローチを行う際の注意として、「適切な問い — research questions — が立てられているかどうか、つまり、探求に値する意義のある問題が発見できているかどうかを検討すること」が重要であると述べている (p. 109)。

以上に示したように、research questionという言葉はさまざまに訳されている。ここに引用した訳語だけでも、〈リサーチ・クエスチョン〉〈研究設問〉〈研究課題〉〈研究テーマ〉〈研究上の問い〉〈研究の問い〉〈研究問題〉〈問い〉と多岐にわたっている。これら以外の言葉にも訳された文献があるだろう。質的研究を勉強する大学院生などは、この節で紹介したような意味で、これらと同じような言葉が使われているときには、その原語はresearch questionであると考えてほぼ間違いはない。本論考では〈リサーチ・クエスチョン〉という表記を使用することにする。

リサーチ・クエスチョンの定義とその実例

質的研究のリサーチ・クエスチョンの定義として、「研究で答えられ、明らかにされるべき問い」というような定義を前項で紹介した。しかし、実際に質的研究を進めようとしている学生や大学院生が、この定義だけに従って有効なリサーチ・クエスチョンを提起することは難しいだろう。

Brink and Wood (1988, p. 2) は、研究課題 (research question) の本質について次のように述べている。「研究の問い (research question) は、挑戦し、調査し、分析できる問題や論点についての明確な疑問であり、役に立つ新しい情報をもたらすためのものである」(ホロウェイ, 2000, p. 21) (括弧内のresearch questionは原著の用語である)

この定義を紹介したホロウェイはよいリサーチ・クエスチョンの例をつぎのように述べている。「～するか」や「～すべきか」という問いは、「はい」「いいえ」以外でこたえることは難しい (ので、質的研究のリサーチ・クエスチョンには向い

ていない)。「初産のお母さんは自分が未熟だという感覚をもつか」という問いは、研究の問い (research question) としては、「初産のお母さんは、赤ちゃんへの対応についてどのように感じているか」におきかえられるだろう。さらに、ホロウェイは質的研究が可能なリサーチ・クエスチョンの例として下記のような疑問文をあげている。

- ・男女同室で患者を配置することにはどんな影響があるか？
- ・管理職評価に関して管理職にある看護師はどのような認識 (経験) をしているか？
- ・多発性硬化症患者は、自分の病気に対してどのように対処しているか？

いずれの疑問文も what あるいは how で始まり、do や must や why で始まっていないことに注意すべきである。ウィリッグ (2003) はリサーチ・クエスチョンの特質をつぎのように述べている。「リサーチ・クエスチョンはオープン・エンデッド (自由回答式) なものである。すなわち、単純に「はい」や「いいえ」で答えられるものではない。リサーチ・クエスチョンからは詳細な記述を与えるような答えが必要である。また、可能であれば、現象の説明も必要である」と述べている (p. 27)。さらに、よい質的リサーチ・クエスチョンは何が起こったかということよりも、どのようにものごとが生じたかを問うと述べ、よいリサーチ・クエスチョンの例として、「慢性病の女性は、どのように妊娠をやり遂げるのか」や「結婚したカップルは、どのようにして子どもの面倒についての取り決めを交渉するのか」や「学生はどのように将来の進路を決定するのか」といった問いをあげている (pp. 27-28)。

Moustakas (1994, p. 104) は、人間科学のリサーチ・クエスチョンはつぎのような要件を満たすものであると述べている。

- 1 人間科学のリサーチ・クエスチョンは、人の経験の本質と意味をより完全に明らかに

しようとする。

- 2 人間科学のリサーチ・クエスチョンは、行動や経験の要素を量的よりも質的に明らかにしようとする。
- 3 人間科学のリサーチ・クエスチョンは、研究参加者の全体的な自己に関わるものであり、個人的な側面や感情的な側面をも対象とする。
- 4 人間科学のリサーチ・クエスチョンは、因果関係を予測したり決定したりしようとしていない。
- 5 人間科学のリサーチ・クエスチョンは、測定値や順位や得点よりもむしろ、注意深く包括的な描写、経験の生き生きとして正確な表現を通してこたえられるべきものである。

さきに上げた「学生はどのように将来の進路を決定するのか」というリサーチ・クエスチョンを、これらの5つの要件に照らしてみると、質的研究のリサーチ・クエスチョンの要件を満たしていることが分かるであろう。「女性の透析患者は治療の日々をどのように経験しているか」というようなリサーチ・クエスチョンも、いくぶん包括的な問いではあるが質的研究の最初の問いとしては適切なものである。

Moustakas (1994) はさらに、「クエスチョンは明白で具体的な用語で提示されなければならない。クエスチョンのキーワードは、研究の意図と目的が明白となるように定義され、検討され、明確化されなければならない。そのことにより、(研究の) 主題を追求する上で何が最も重要であるか、何のデータを収集すればよいのかを決定する」と述べている (p. 104)。

研究の過程のなかでのリサーチ・クエスチョンの位置と働き

【主観の研究としての質的研究】質的研究の対象となる現象は研究参加者、あるいは協力者の意

識である。主観といってもよい。質的研究は自然科学的、あるいは実証主義的研究とは異なる現象学的研究である。たとえば、ボール投げのような運動技能の学習で、投げられたボールの可否について指導者からフィードバックがあたえられる学習法と、投げるフォームの可否についてフィードバックがあたえられる学習法では、子どもたちのピッチングはどちらが上達するかというような研究は自然科学的研究法である。子どもたちは研究者にとって、研究されるべき客体である。被験者といってもよい。一方、子どもたちは2つの異なる学習法のなかで、どのような経験を意識しているのかという問題を設定すると、その答えは子どもたちの主観の世界を詳しく聴き取るほかはない。研究者は自分の心を無にして、子どもの報告に耳を傾けることになる。これは現象学的研究法である。そこでは、子どもたちは研究者にとっての被験者ではなく、学習法の違いによって子どもたちはどのような経験をするかということを知るための研究の協力者（あるいは研究参加者）となる。

質的研究法には〈ナラティブ研究〉〈解釈学的現象学的研究〉〈グラウンデッド・セオリー・アプローチ〉〈ケーススタディー〉などさまざまな方法があるが、いずれの方法も研究協力者の経験を聴き取ることが研究の共通の基本となっている。Moustakas (1994) はこのような研究法を現象学的研究法に含めている。質的研究におけるリサーチ・クエスチョンは研究協力者の経験を聴き取るための質問・疑問を焦点化し、ゆるい方向性をあたえる働きをする。リサーチ・クエスチョンは研究協力者の主観の世界を探りだすきっかけをあたえる働きをすることになる。

【質的研究におけるリサーチ・クエスチョンの位置づけ】Moustakas は現象学的研究で科学的証拠を得るためには、組織化され体系づけられた研究の方法と手順が必要であると述べている (p. 103)。このような研究方法の必要条件について、

彼は研究を3つの段階に分けて解説を行っている。3つの段階とは、〈データ収集の準備〉〈データの収集〉〈データの整理、分析、統合〉である (Moustakas, 1994, pp. 103-119, p. 181)。

質的研究では〈半構造化インタビュー〉を行い、〈録音されたインタビューの転記〉を行い、語られた文言を〈帰納的にカテゴリー化〉し、カテゴリーの〈概念化〉を行うというような研究の手順は、上記の3段階の後半の2段階にあたり、多くの質的研究の参考書に書かれている。リサーチ・クエスチョンの提起はその前段階、つまり〈データ収集の準備〉の段階に含まれている。Moustakas は「インタビューのプロセスをうまく進めるためにはリサーチ・クエスチョンを明確に作っておく必要がある」と述べている (p. 103)。

フリック (2003) は、「リサーチ・クエスチョンは何もないところからでてくるのではない。多くの場合、それは研究者の側の個人的なライフヒストリーや社会的背景に由来する。日常と学問の文脈がともに研究設問 (リサーチ・クエスチョン) の決定に関係してくる」と述べている。また、フリックは、リサーチ・クエスチョンは研究の全過程を通して固定したものではなく、クエスチョンを向ける対象グループを選んだ段階や、分析方法を決定した段階や、データを分析し始めた段階などで、柔軟に調整することが望ましいと述べている (p. 62)。たとえば、教師のストレス経験について研究しようとしている研究者が、「教師は学校でどのようなことにストレスを感じているか」というリサーチ・クエスチョンで研究を始めようと計画していたとしよう。インタビューを進めるうちに、生徒の親たちがスプレッサーとして大きな働きをしていることが、研究の計画の段階では予想できなかったほどであることが分かってきたとしたならば、リサーチ・クエスチョンを「教師は親たちからどのようなストレスを感じているか」に変えていってもよいということである。フリックはこのようなりサーチ・クエスチョンの調整を、

〈全般的な設問を定める〉→〈特定のな研究設問を定める〉→〈特定のな研究設問を点検し、練り直す〉というように表現している。特にグラウンデッド・セオリー・アプローチでは、そのアプローチが〈データ対話型〉である理由によって、このような調整は一般的に行われている。

Creswell (2007) は、質的研究の準備段階をつぎの3段階に分けている。〈問題=research problemの提起〉〈目的=purposeの陳述〉〈リサーチ・クエスチョンの提示〉の3段階の準備過程は、すべての質的研究で明示されているわけではないが、注意して読めば識別することができる。また、このように準備段階を構成すれば、インタビューの発問もスムーズに進めることができるし、データの分析にも助けになるので、大学院生のレベルで質的研究を行うものは意図的に3つの準備段階を書いてみるのが勧められる、とCreswellは述べている (pp. 101-115)。これら3つの準備段階については、つぎの項で詳しく説明する。

リサーチ・クエスチョンのタイプと分析法の選択

【研究の〈問題〉〈目的〉〈リサーチ・クエスチョン〉〈インタビュー〉の関係】前項の最後で〈リサーチ・クエスチョン〉は研究の〈問題〉〈目的〉とデータ収集のためのインタビューをつなぐ役割をしていることを述べた。その関連の一つの例を以下に示す。

CreswellはMiller (2000) の「17人の女性の出産についての研究」での〈目的〉を引用している。『母親になることの経験についての女性の説明を含む研究において、私は、女性が出産の過程を通して、どのように出来事の意味を理解し、どのように出来事をエピソードに構築し、それによって彼女たちの人生に統合性・一貫性を保っていくのかを知ろうとする』

このような研究目的のもとにリサーチ・クエスチョンが立てられることになると、その設問はつぎのようなものが可能だろうとCreswellは述べている。

- ・この個人（母親）の人生において、この経験（出産）はどのようなものであるのだろうか？
- ・この経験（出産）についてどのような物語を語るることができるのか？
- ・物語のなかにどのような転換点があるのだろうか？

このように、リサーチ・クエスチョンは研究目的に役立つ答えを引き出すために、複数の項目が立てられることが普通である。このようなリサーチ・クエスチョンに従って、インタビューでは「妊娠を知らされたときから出産までの気持ちの変化があったら話して下さい」とか、「今回の出産はあなたにとってどのような意味が感じられましたか？」というような質問によって、自由回答の半構造化面接が進められるのである。また、このような研究目的とリサーチ・クエスチョンは分析方法として〈ナラティブ研究〉を用いることになるだろう。

一方、〈目的〉の上位に位置づけられている〈問題〉については、Creswellは「研究の必要性」と考えてもよいと述べている。上の出産の例でいうならば、「出産に臨む母親の精神的サポートを行うために、母親の心理の理解が必要」といった問題意識が考えられるであろう。このような問題意識の出どころとしてCreswellは4つの源泉をあげている。それらは、①論点となっている問題についての個人的経験、②仕事と関わっている問題、③指導教員の研究プロジェクト、④学術論文のレビュー、などである。

【分析法の違いによるリサーチ・クエスチョンのタイプの違い】本論考のここまでのところは、質的研究全般についてのリサーチ・クエスチョンの問題を述べてきた。しかし、研究の問題意識の持ち方や、それに続くリサーチ・クエスチョンの立て方によって、研究協力者の集め方やデータの分析法に違いがでてくる。Creswellは、〈問題〉

〈目的〉〈リサーチ・クエスチョン〉〈5つの分析法〉の関係を詳しく述べている (chap. 6)。この項では、心理学の研究でよく使われる〈ナラティブ研究〉〈(解釈学的)現象学的研究〉〈グラウンデッド・セオリー・アプローチ〉などの研究法に適したリサーチ・クエスチョンの立て方を紹介する。〈ナラティブ研究〉については、すでに前項で紹介した。

〈現象学的研究〉では、問題意識の持ち方は、「特定の現象についての、(目標標本内の) 個々に共通した経験の内容を調べること (p. 103)」である。たとえば、このような意識は「教師としてのプロ意識」という〈内的〉現象を、新人教師という〈目標標本〉の個々人の経験から聞き取り、共通した経験の内容を調べる、というような研究目的につながる。ここで、研究者が短絡的に研究参加者に「あなたの教師としてのプロ意識とは何ですか?」とインタビューしても、有益な情報は十分には得られない。インタビューに先立って、研究デザインの1段階として、リサーチ・クエスチョンを設定しておき、それに基づきインタビューの発問が系統だてて行われるようにする必要がある。Creswell は「教師としてのプロ意識」という問題に適したリサーチ・クエスチョンの例を次のように示している。

「教師としてのプロ意識」についての〈中心的クエスチョン〉

・研究参加者にとってプロの教師であることは何を意味しているか?

〈下位クエスチョン〉

- 1 プロの教師は何をするか?
- 2 プロの教師は何をしないか?
- 3 「教師としてのプロ意識」を体現している人は何をやるか?
- 4 プロの教師であることで、簡単にできると困難なことは何か?
- 5 自分がプロであることを何時、どのように

気づいたか?

- 6 教師のプロ意識という言葉の意味の構造は何か?
- 7 教師のプロ意識の根底にあるテーマは何か?
- 8 小学校の教師がプロ意識を語る時に取り上げられるテーマは何か?

〈下位クエスチョン〉の1-5までは、論点についてのクエスチョン (issue subquestions) とよばれており、6-7は、現象学的な意味構造を調べる狙いを持った手続き的クエスチョン (procedural subquestions) と呼ばれている。〈下位クエスチョン〉は〈中心的クエスチョン〉を分解したものであり、インタビューの質問に近づけた疑問である。

〈グラウンデッド・セオリー・アプローチ〉は経験の意味内容を理解する現象学的研究とは異なり、出来事の生成過程を研究協力者がどのように捉えているかを理解しようとする方向性を持っている。この方法は研究協力者から得られたデータに基礎をおいて、新しい理論を提案したり、従来の理論の隙間を埋めたりすることを目的としている。Creswell は、Morrow and Smith (1995) の「児童期の性的虐待を生き抜いた11人の女性」の研究で用いられたグラウンデッド・セオリー・アプローチのリサーチ・クエスチョンについて述べている。この研究ではリサーチ・クエスチョンが明示されていないが、インタビューのガイドラインとしての疑問文の中に、包括的な疑問が含まれていることが読み取れる。

「いま、私に話しても不快ではないことを話してください。あなたが性的に虐待を受けたときどうしましたか?」とか、「どうやって、その苦しい状態を切り抜けましたか?」というようなクエスチョンは、研究者が被害者の女性の経験を理解することに関心を持ち、虐待に対する対処方略を知ろうとしていることが含意されている。このようなクエスチョンはプロセスの理論を構成しようとしているものとみなすことができる。グラウン

デッド・セオリー・アプローチではつぎのようなポイントからリサーチ・クエスチョンが立てられることが勧められている (Creswell, 2007, p. 112)。

- 1 研究対象のプロセスはどのように展開したか？
- 2 そのプロセスの中の大きな出来事は何であったか？
- 3 変化の障害となったものは何か？
- 4 そのプロセスにはどのような重要人物が現れたか？その人物は何をしたか？
- 5 そのプロセスの結果はどうなったか？

以上、質的研究におけるリサーチ・クエスチョンの意味と役割について述べてきたが、ここで論じたことだけで質的研究を首尾よく進められるかどうかについては、若干の不安もある。

大学院生は、質的研究の実際の「作品」を精読して、ここに紹介した事柄とつき合わせていただきたい。水泳の方法を読んだだけでは泳げようにならない。水に入って泳ぎの真似をするほうが、水泳の学習の早道である場合が多い。筆者らは今後も質的研究のリサーチ・クエスチョンを含めて、研究の準備段階について研究を進めるつもりである。

引用文献

- Creswell, J. W. 2007 *Qualitative Inquiry & Research Design. Second Edition.* Sage, Thousand Oaks, Cal.
- フリック 2003 『質的研究法入門 <人間科学>のための方法論』小田博志他(訳) 春秋社 (Flick, U. 1999 *An Introduction to Qualitative Research.* Thousand Oaks, Cal. Sage.)
- ホロウェイ 2000 『ナースのための質的研究入門—研究方法から論文作成まで』野口美和子(監訳) 医学書院 (Holloway, I. & Wheeler, S. 1996 *Qualitative Research for Nurse.* Blackwell Science, Malden,

USA.)

- 木下康仁 2006 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い 弘文社
- Miller, T. 2000 *Losing the plot: Narrative construction and longitudinal childbirth research.* *Qualitative Health Research*, 10, 309-323.
- Morrow, S. M. & Smith, M. L. 1995 *Constructions of survival and coping by women who have survived childhood sexual abuse.* *Journal of Counseling Psychology*, 42, 24-33.
- Moustakas, C. 1994 *Phenomenological Research Methods.* Thousand Oaks, Cal. Sage.
- Murray, M. & Chamberian, K. (eds) 1999 *Qualitative Health Psychology.* Sage, London.
- Smith, J. A. 2003 *Qualitative Psychology.* Sage, London.
- ストラウス、コービン 2004 『質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリーの開発と技法と手順 第2版』操華子・森岡崇(訳) 医学書院 (Strauss, A. & Corbin, J. 1998 *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*, 2nd ed. Sage, Thousand Oaks, Cal.)
- 鈴木裕久 2006 臨床心理研究のための質的方法概説 創風社
- ウィリッグ 2003 『心理学のための質的研究法—創造的な探究に向けて—』大淵寿他(訳) 培風館 (Willig, C. (2001) . *Introducing Qualitative Research in Psychology.* Open University Press, Buckingham, UK.)